

## 技能知の獲得における手続的知識と概念的知識に関する一考察

教育心理学教室 高 取 憲 一 郎

### 1 はじめに

前稿<sup>(1)</sup>では、生田久美子<sup>(2)</sup>の「世界への潜入」という概念をキーワードにして、職人と伝統芸道における技能知の獲得過程を検討した。

周知のように、生田の「わざ」の理解構造は主観的活動(自分1)→客観的活動(自分2)→(自分3)の三段階から成り、それは日本の伝統芸道における「守・破・離」の三段階に対応するという。すなわち、(自分1)の状態とは、学習者がある「わざ」の世界に入門して師匠の「形」を模倣し、それを繰り返している状態であり、「形」をまねるだけで精一杯という状態である。当然、自分を客観視し自分以外の周囲の世界を眺める余裕もまだない。そして、このような状態の中で、その初心の入門者は師匠の家の中で行儀作法を学んだり、他の弟子と会話を交わしたり、他の弟子の稽古を見学したり、さらに師匠の日常生活と関わったり、師匠の家にあるものと関わったりするなかで、「わざ」の世界のリズムに自分の生活のリズムを同調させていく。これを、生田は「世界への潜入」と呼んでいる。

さて、このような「世界への潜入」という段階が深化するにしたがって、師匠の示す「形」を感応的に把握し、同調的に反応する能力が高められていくのであるが、同時にそのような自分を客観的に眺めるもう一人の自分が分化してくる。これが、第二段階の(自分2)という状態である。すなわち、模倣と繰り返しに没頭する自分を眺めるところの自己の中の他者が現われる。ここにおいては、今まで自分が模倣し繰り返してきた「形」を批判的に吟味し反省するという行為が現われ、自分なりに師匠とは異なる工夫を試みてみるという行為が現われる。

以上のように、第一段階は主として肉体の世界、非言語の世界であり、第二段階が非言語的世界から言語的世界への過渡的段階であるとするならば、最後の第三段階は主として言語的世界に入るのであろう。すなわち、生田によれば、第三段階においては、学習者は「わざ」の世界全体の意味連関を自ら作り上げていき、その中で自分や他人が表現する「形」の意味を考え始めるという。私なりに換言すれば、それまで自分の内部だけに限定されていた、もしくは自分と師匠という最小の対人関係の中だけに、あるいはせいぜい師匠の家の中だけというような狭い範囲に限定されていた自己の行為を、自分をとりまく世界全体の中に位置付けることができ始める。そのことによって、自分が今まで苦勞して積み重ねてきた稽古の結晶たる「形」というものが、自分も含めた世界全体のあり方あるいは世界の法則の必然性に則っていることを認識し充足感を味わうのである。

このように見てくると、既に触れた「守・破・離」というのは、まことに言い得て妙である。すなわち、まず模倣と繰り返しを通じて自己の内部へと師匠の「わざ」をひたすら取り込み、その後自己の枠を破り自己の外部へとみ出し、師匠から受け継いだ「形」を乗り越え、最後には自己から離れて世界と自己とを客観視し、その両者の意味連関をつける。生田の説に従えば、このように「わざ」の理解は進む。

ところで、生田の「世界への潜入」という概念をこのように見てくると、前稿で考えていたのとは少し異なっており、技能知の獲得という問題が必ずしも非言語の世界でのみ行なわれるとは単純に言えなくなってくる。第三段階においては、自己の行為を世界の意味体系の中に意味づけるということからしても、技能知は言語的世界との緊密な関わりをもたざるをえなくなる。たしかに、そういうふうには解釈しなければ、生田の言う「心身合一」というような観点は出てこないであろう。

この点で、波多野と稲垣<sup>(9)</sup>の「手続的知識」、「概念的知識」、「理解」という見解は注目される。波多野たちは、文化の中核たる知識が、世代から世代へと伝達されると同時に個人により構成される、すなわち新たなものが造り出され付け加えられるというメカニズムに関して次のような仮説を提出している。

(a) いかなる文化もその重要な部分として、その文化の中で生活していくうえで必要な手続的知識を数多く有しており、社会はもっぱらそれをその成員に獲得させようとする（この限りで知識は、基本的に伝達されるものである）。(b) しかし人々は、より深い理解への動機づけをいわば生得的にもっているため、獲得した手続的知識を適用する中で、ときとしてこれに対応する概念的知識をしいてつくりあげていくことがありうる（この限りにおいて、知識は個人的な構成物である、と見なされる）。概念的知識の構成により、人々は与えられた手続きをそれぞれの仕方で意味づけ、すなわち理解し、それによって文化に直接的には規定されなくなり、ある意味ではそれを超えることができる。

さらに、上の仮説の記述の中で用いられたキーワードについて、波多野たちは定義を与えているがこれも非常に重要なので抜き出しておこう。

まず手続的知識とは、ある領域や課題において問題を解くために繰り返し用いられる手順(routine)をあらわすものであるとする。すなわち、“こういうときにはこうする”といった、条件と行為の対(プロダクション)の集合によって記述できるものであるとする。また、概念的知識とは、手続きの対象を含む世界を代表するモデルを意味するものであり、なぜその手続きがうまく働くのかとか、それぞれのステップでこのように行為することがなぜ必要なのかを説明する基盤を与えるとされる。さらに、最後の段階である理解とは、多少とも首尾一貫した解釈を確信をもって採用することと定義されている。

このような、波多野たちの手続的知識、概念的知識、理解の三段階論は、私見によれば、生田の「守・破・離」、すなわち(自分1)、(自分2)、(自分3)の三段階論とほぼ対応するものと思われる。ただ、生田の場合の第二段階は波多野たちの場合の手続的知識と概念的知識の両者にまたがる状態であり、過渡期として位置付けられよう。また、波多野たちの理解という段階は、生田の場合の(自分3)のより高次の段階として考えることができよう。

さらに、波多野たちは、手続的知識は容易に獲得されるが、それだけでは応用力や適応性に大きな限界があること、概念的知識を構成して初めてそれまでの文化の水準を超える新たな手続的知識を発明することができることを指摘している。この、波多野たちの見解は重要である。従来、ややもすれば、伝統芸道とか職人が技能を習得する過程は、非言語の世界とか肉体的鍛練の世界とかと単純

にみなされがちであったが、それは、ただそれまで伝えられてきた水準を維持するだけであれば、それでも構わないわけであるが、一段の飛躍とか発展とかを考えれば、言語的世界への移行が不可欠なのである。そこにおいて初めて、生田の言う「心身合一」という議論の妥当性が現われるのであろう。

以上のように、現代の認知心理学の知見に依拠しながら、技能あるいは技能知に関わる議論を見てきたわけであるが、ここでぜひともとりあげておかねばならないのは南博<sup>(4)</sup>の見解である。南は、日本のいや世界の心理学研究者のなかでは唯一、伝統芸道の持つ心理学研究上の意義を認識している大先達である。しかも、最近になってようやく認知心理学の一部の人たちがその意義に注目して研究を開始したはるか以前に、認知心理学的潮流とは異なる独自の視点からその議論を展開している。南の学問的見識に対しては、まことに頭の下がる思いである。以下に、彼の到達した問題意識を検討しながら概略を見てみよう。

南の伝統芸術論、芸道意識論は、驚嘆すべきことであるが、上に触れた現代の認知心理学的議論のほとんどすべてを含んでいる。重要な論点を私なりにまとめれば、四点ほどに要約できる。それらは、①基本型と創造型、②型の芸術と内容の芸術、③芸術的人格、④自然と人間の統合である。

まず、基本型と創造型であるが、南によれば、型には二つあり、創造型とは独創的な天才が自分の創造過程の最後に到達した最高の表現形式としての型である。一方、基本型とは、上の創造型をモデル・手本として作られた練習のための基本型である。芸道の修業というのは、先人のつくった創造型にもとづく基本型をまず十分に学びとり、次にはその基本型をくぐりぬけて、自分で独自の創造型を生み出していく努力にほかならない、と述べる。この、南の議論は、われわれが既に見てきた生田、および波多野と稲垣の説とまったく同じことを主張していると思われる。すなわち、生田の段階1（主観的活動、自分1）と南の基本型は同じものを指していると考えられるし、段階3（自分3）と創造型も対応していると思われる。また、波多野たちの場合との対応では、南の基本型は手続的知識と、創造型は概念的知識の発展形態と見なされるところの理解という段階と対応していよう。南の場合は実証的な研究というよりも、たとえば能とか和歌、俳諧などの芸術論を文献的に研究することによりこのような議論に到達したのであるが、南のパースペクティブの広さと深さには敬服すべきものがある。

次に、型の芸術と内容の芸術について見てみよう。南は芸術を身体芸術と非身体芸術の二つに分類する。おどり、うた、語りなどは前者であり、文学たとえば和歌、俳諧などは後者のジャンルに入る。そして、身体芸術は見まね、聞きまねの真似事を主とする身体的訓練による型を介して伝承される。そのために、個人的な接触が可能な家族あるいは小集団の内部で、世襲的に行なわれる場合が多い。したがって、非身体芸術に比べて保守性・閉鎖性が強い。一方、文学に代表される非身体芸術では、身体芸術よりも発展性・開放性が大きいとする。すなわち、型よりも内容を重視する。

この、南の第二のポイントも波多野たちとの関連で興味深い。すなわち、身体芸術は波多野たちの言う手続的知識の占めるウェートの大きい芸術であり、手続的知識の反復訓練の後に概念的知識が芽生え、さらに才能に恵まれた一部の者がその上の段階すなわち理解に至るという図式であろうか。これに対して、非身体芸術は、もちろん手続的知識の段階も経過するわけであるが、それよりもむしろ、概念的知識に到達してからの発展性のほうが重要である。南も指摘するように、技術・方法・内容のすべてにわたって型の伝承と保守を重視する身体芸術と違って、非身体芸術は自由度が高く展開的である。むしろ文学などは、内容を構成する思想や観念が新しくなるのに応じて、新しい技術や、方法、形式を要求するのである。非身体芸術の場合は、波多野たちの言う概念的知識

の占めるウェートが大きいのである。

第三のポイントである、芸術的人格を見てみよう。南は、世阿弥『風姿華伝』中の型について述べたという次の箇所を引いて論を起こしている。「稽古とは、音曲・舞・働・物真似、か様の品々を究むる形木（かたぎ）なり」。南によれば、形木は江戸時代になると気質（かたぎ）という字を当てられ、今日の心理学で言うパーソナリティに近い意味を持つてくるという。そして、世阿弥の言う形木は、一人の芸術家が彼の全人間を賭けて到達しようとするところの、行動と思想の統一されたものという意味において、パーソナリティとか芸術的人格と言い得るという。私なりにこの形木を解釈すれば、生田の段階3すなわち自分3の段階に対応する人格的側面が形木であり、生田の言う「心身合一」であろう。また、波多野らの理解の段階に対応する人格的側面にも対応しよう。

このように見てくると、芸術的人格を指す形木は基本型の習得を踏まえて、さらに創造型にまで到達した芸術家の人格であるということがわかる。また、われわれはしばしば、職人氣質という言葉を用いるのであるが、これも段階3に至った職人の人格的側面を指すというふうに理解すれば、職人の場合と芸道の場合の類似性が一層際立ってくるであろう。実は、本稿では職人の具体例に即して議論をすすめる予定であるので、このポイントは記憶にとどめておかねばならない。

では、最後の自然と人間の統合というポイントに話を移そう。南は、日本の伝統芸術の特徴として、自然を媒介として人間性の回復を試みようという、きわめて人間的な要求に発している点をあげている。これは、われわれが前稿で渡植彦太郎の技能知を検討した際に注目した技能知をエコロジカルにとらえるという視点とあい重なる。渡植の指摘するように、技能知が伴う技能とは、自然環境を傷つけず、人間と自然との調和を保つように機能するものである。この点で、渡植は伝統芸道、職人、主婦に共通に技能知は働くとするのであるが、南の議論は渡植の議論を既に包括している。

以上のように、今日の認知心理学の知見および南博の卓越した芸術心理学的見解を参考にしながら、われわれの問題意識の概略を述べてきたわけであるが、次に本稿の直接の目的に触れておこう。

前稿を書いた時点では、技能知の習得はもっぱら非言語の世界で行なわれると解していた。ところが、これまでのところで見えてきたように、非言語の世界のみの習得および伝達では必ず限界につき当たる。その限界とは、従来の文化の到達水準を超えることが、非言語的世界の範囲内ではできないという点と、心身合一の境地あるいは南の言う芸術的人格の段階に到達することが非言語的水準のみでは不可能であるという二つの意味を持つ。

そこで、本稿では、前稿と同様に職人のいくつかのケースを検討しながら、波多野たちの言うところの文化を伝承しそれを超えるということ、すなわち、知識は社会的に伝達されると同時に個人によって構成されるという二面性をもつという点に焦点を絞って、それが単に身体的訓練のみによって成し遂げられるのではなく、波多野らの言う概念的知識とか理解という段階にまで到達しなければ生じえないということ、そして、それらが人と人とのコミュニケーションも含む社会的・文化的過程の中で営まれるということなどを検討し、若干の考察を加えてみたい。

## 2 方 法

二人の職人を対象に聴き取りを行なった。聴き取りに要した時間は、一時間前後である。実施時期は、1990年11月および1991年6月である。

### 3 結 果

#### (1) 和菓子職人 (昭和20年生まれ, 調査当時45歳) :

和菓子作り職人の二代目である。高卒後、父親の後を継ぐことになったが、父親の作る菓子は昔風なので今後はもう売れないと考えて、新しい和菓子作りを覚えるために東京の専門学校へ1年間入る。その後、1年半は東京の和菓子屋へ弟子入りするかたちで勤めた後、帰郷した。帰郷した後は、本を参考にしたり、東京の先輩に尋ねたりして、自分の努力で試行錯誤しながら、また地元で同業者の勉強会を開いたりしながら新しい菓子づくりに挑戦している。この人の場合は、自分の父親から直接学ぶということはほとんどなく、他人から学んだことのほうがはるかに多い。しかし、子どもの頃から父親の仕事はときどきではあるが見ていた。自分の子どもは娘しかいないので、後継者はいない。以下に、聞き取りの抜粋を示す。

(前略)

「職人さんが減っているっていうのはどうしてですか？」

「やっぱり、そのむづかしいっていうのが第一だろうね。技術を覚えるのがね。10年くらいかかる。10年でもまだ初歩をかじったぐらいですけどね。和菓子はとつても底が深いですが。洋菓子はベースが決まっていますからね。和菓子は、あんこを作るのからむづかしいだが。それから、いちばんむづかしいのが、包みあんするっていうんだけど、結局包むんですね。これに、4、5年かかる。」

「徒弟に入ったときの勉強の仕方というのはどういうふうなんですか？」

「職人はあんまり教えてくれんしね。結局、盗み見ですが。むこうが量るのをぱっとみて、帳面に書き込んだりね。それから、どういうことをつくるか、他のことをしょうって見ても自分の帳面に書きようりましたよ。それと、見もって、見て覚ええないけんですな。盗んで自分のものにしてうって一生懸命です。職人は、自分からは教えますよね。こっちが聞かんと教えます。なかなか上手に教えてくれんしね。やっぱり自分の持っているものは教えたくないっていうんでしょうね。結局、自分の秘伝ですからね。」

「まず最初はあん炊きですわ。いろいろなあんの種類がありますからな。それを覚えるのも3年か4年はかかりますよ。この和菓子はあんが命ですからね。」

「あんこの炊き方というのは教えてもらったのですか、最初の時に？」

「一応、見もって、炊いてみて、『どうですか』、『どうですか』ってもっていかないけんだが。ずっと、見てくれせんだけえ。」

「手とり足とりってことは？」

「絶対ないです、そんなことは。自分が入ったら他の人が炊きようるでしょう。それを見もって、教わるんですからね。3、4年かかりますよ、あんで。それにね、あんというのはその店の一番の熟練者が炊くんですわ。次ぎに習うのは何かというと、この菓子を包む。これがまた包めんだ。これ包むのに4、5年かかる。だで和菓子はむづかしいだが、それでみんな苦労しようるだが。」

「包み方は見るしか覚え方がないのですか？」

「見るしか方法がない。それで、とにかく自分はさかづきを、ちょこをたえず毎日こうしてひねりようったもんですわ。寝とつても起きとつてもひまさえあれば。仕事がすんで職人が帰ってから、後は夜、自分はそこに残ってね、一生懸命やってみたりね。そういうかたちでまあ覚えていつて、

後はこっちに帰ってから本読みもって、いろいろ研究していったわけですね。いろいろ苦勞して本見もってね、考えもって自分でアレンジして、いろいろ工夫して、それから、自分の場所で売れる菓子じゃないとね。都会の菓子とこの家の菓子とは違いますからね。都会のは、今一個200円300円、このへんで一個100円くらいでしょう。だから同じのを作っても駄目なんですけど、とってもコスト高くなってね。だから、こっちにあったようにアレンジして作っていかないけんだし、まあ、そういうことを考えもってあみだしていくんですけどね。」

「和菓子を作られていておもしろいこととかはありますか？」

「ええ、ありますよ。もうこれは底のない仕事ですからね。掘れば掘るほどいっぱいできてきますからね、この仕事は。」

「いろいろな研究会などで勉強されているとかとうかがっていますか？」

「この地域で菓子組合っていう組合があるのですが。その中で、青年部っていったらおかしいな、もう壮年部、だいたい45まで、これが一応菓子の研究会。自分らが集まって作ったんです。菓子作って持っていったり、慰安旅行していろいろ話し合ったりで、ようやく去年か、45過ぎたから、今、ちょっと顧問になつとるけどね。それとは別に菓子の講習会もしょうりますけどね。講習会もやつとるし勉強会もやつとるですよ。それまでは、飲んで騒ぐ会はあったけど、勉強する会っていうのは全然なかったです。それじゃあいけんって言って、特に自分はよそに出とったでしょう。よその菓子の厳しさを見てきとるでしょう。とっても厳しいですけえ。一カ月に何回かよその研究会ってあります。みんなが菓子もちよって研究しようるのですが。鳥取に帰ったらみんなのんびりしとるな。魚釣りしたり、ひまだな一て、しとるでしょう。なんだこりゃ、鳥取の菓子はこりゃいけんな一て言って、で、自分だってこっちへ帰ったら体がだるっちゃうですが、都会に出るとまたしゃきってして、これじゃいけんってことで何か研究会をしようってことで、それでそういう会を作って」

「研究会はお父さんの頃にはあったのですか？」

「全然なかったですね。自分が部長しているときにね、講習会しようって行って、それで、昔の人の技術と若い人の技術を集めて講習会したのですが。とにかく、鳥取の菓子屋さんのはのんびりしとる、これじゃいけん、いつまでもしとったら今度はよそにやられますからね。いまどんどん都会のが入ってくるでしょう。みんなむこうに食われちゃうからね。やっぱり対応できるような菓子を作とかないけんちゅう、そういう頭があったですね。」

「こういう仕事をして一番良かったと思われることは？」

「まず、自分の腕が出せた。腕が発揮できたってことが大事。すべてこの菓子里に自分の技が出せる、これが一番じゃないかな。勤めだどできんけねえ。自分の思ったもの作れて配達できて、それを買ってもらえる、それが一番うれしいことだけねえ、それが一番じゃないかな。」

## (2) 紙漉き職人 (大正4年生まれ、調査当時76歳) :

子どもの頃から母親が紙を漉くの見て育つ。18歳の時から県主催の伝習所で講習を受けるなどして本格的に紙漉きを始めたが、その後養子に行き、そこで家業として営むことになる。紙漉きに必要、水、トロロアオイなどの原料に関する知識にも詳しく、また、漉くときに用いる道具の吊し方などに、独自の工夫をとりいれている。現在、息子が後を継いでいる。以下に、聴き取りの抜粋を示す。

「僕が気がついたときには、母親が一人紙漉きしたり、その漉いた紙を乾燥したりしとりまして

な。そこに行って話を聞いたり、まあ邪魔しとったわけですね。母親があっちへ行けばついて行き、小学校にあがるまでそうしとったんです。」

「(18歳の頃) 父親にやってみろって言われましてやってみるんですけど、紙は漉けるんです。これは誰にでもできます。でも商品としてはだめなんです。だから父親によく、そんなもん売れんって叱られました。あっちが薄かったり、こっちが厚かったり、100枚なら100枚のなかのどれもが同じ厚さじゃないと商品にならんです。僕が歌を歌いながら漉いとりましたもんですけえ、歌歌いながらなんかやとるけえだって叱られました。それから本気になってやり始めまして、10日たった頃に、まあまあできだいなあ、この調子でやれって言われまして、それでイメージっていうもんをつかみましてな。その後で兵隊に行っただす。」

「(全国的な伝統工芸展などで) 褒めてもらえば褒めてもらうほど、競争心もでてきましたけど、そのうち、自分のうちでいいものを作ればいいんだ、と思うようになりましてな。それで、息子とよう話すようになりましてな。あそこはこうしたほうがいいのか、ここはこうしたほうがいいのか、本当に飯の時間が楽しくなりましてな。ここにきて自分たちなりの紙漉きのやりかたを研究してきたって言うてもいいです。それが3年ぐらい続きましてな、たくさん研究したもんですけえ、その滓がたまりにたまりまして、軽トラいっぱいに滓を捨てましたなあ。それで、紙ってというのはこういうもんだなあっていうのが、わかるようになりましてなあ。努力っていうのはえらいもんです。」

「ほんに、僕は紙をやとってよかったなあと思います。母親の横でいろいろ聞いたのがよかったと思います。親っていうのは本当に子どもにとっては大事なもんですわな。やっぱり、子どもは親を見て育ちますわな。」

「これは、全部僕が体験してきたことをもとに自分で研究してきたんです。人のものと比べて違うところを見つける。で、これはどのようにしてある、これはどのようにしてあるっていう具合に、人と一緒になって、いいものをつくることに専念するんです。人のものを見て、いいもの悪いものの区別がつく目を持つことが一番大事ですわな。その目を養うのも訓練の他に方法はありません。」

「お祖父さんにあたる人が、いい紙漉くっていうことはな、朝けんかしたようなもんが漉いたっていいもんは漉けんって言われましたけど、そのとおりです。だけん、心が騒がずに、その漉きよいう紙にうちこむって言ったらおおげさですけど、頭にいらんことがあったりしますと、この仕事は一枚一枚見ていくもんですから、この時は何か考えとったなっていうことがすぐわかりますわな。」

「初めに、いい癖をつけることが大事ですわな。だから、誰の言うことでも素直に聞くことが大事です。教えてくれるっていうことは、自分よりは習わせる人は一枚上ですから、その人の言うことをストレートに聞いた人がやはりいい紙やいい葉が作れます。一回癖がつきますと、直そうと思っはいるんでしょうけど直りませんわな。順序が決まっていますからな。だから、いい順序を覚えてしまうっていうことが紙漉きにとっては一番大事なことです。」

#### 4 考 察

本稿でとりあげた二人の職人は、前稿でとりあげた二人の職人とは少し違いが見られる。それは、波多野らの「手続的知識」と「概念的知識」、「理解」というキーワードおよび「手際のよい熟達者」と「適応的熟達者」というキーワードを用いれば、よく解釈できそうである。

波多野らによれば、手際のよい熟達者(routine experts)とはただその技能の遂行の速さ・正確さ・

自動性などにおいてのみ他の人々と比べてすぐれている人々のことである。これに対して、適応的熟達者 (adaptive experts) とは自分の遂行している手続きを内示的および外示的に理解していて、状況的制約の変化に合わせて手続きを修正していくことができ、柔軟性と適応性を獲得している人々のことである。ここで、手続きを内示的および外示的に理解するとは次のように定義されている。その技能を遂行する人が、なぜその手続きがうまく働くのかを言語的に説明できれば、彼はその手続きを外示的に理解していると考えられる。一方、言語的には説明できないけれども、適切な遂行の仕方と誤った遂行の仕方を区別することができれば、内示的に理解していると考えられる。

私なりに解釈を加えれば、手続的知識の段階にとどまっている場合が手際のよい熟達者、概念的知識の段階へ到達している場合が適応的熟達者にほぼ対応するのではなかろうか。今回とりあげた二人の場合は、適応的熟達者の中でも特に外示的理解の高度の段階にあるケースであろう。前回とりあげた二人の場合は、共に適応的熟達者であることには間違いはないが、外示的理解という点において今回の二人ほどはまだ進んでいないと言えようか。では、その差はどこからもたらされたのであろうか。

波多野らは、手続的知識の段階から概念的知識への移行のきっかけを、人々がある手続きを遂行する際に、どうしてそれがうまく働くか、あるいは、どうしてそれぞれのステップが必要なのかを自問することに求めている。たしかに、これは概念的知識へと移行するために一般的に必要なきっかけではあるが、外示的理解の高度の段階へと概念的知識を構成する、さらに言えば、概念的知識の段階から理解の段階へと移行するためには、波多野らが別のところで指摘している「より深い理解を奨励しあう小集団」の働きとか、そのさらに深いところで働く社会的・文化的な過程の働きが重要な役割を果たしているように思われる。

たとえば、和菓子職人の場合は、若い頃に東京へ修業に出て、商売の厳しさとか生産者同士の競争の厳しさなどを肌で感じて帰郷したこともあり、このままでは県外の業者に食われてしまうという危機感から、地元で研究会を組織し、互いに切磋琢磨しながら技をみがき、原料などの改良・工夫をこらしている。そのような研究会組織の発起人になり、中心になって活動してきたということが、彼の場合は波多野らの言う理解という段階に至る非常に重要なきっかけになっているのではなかろうか。

もう一人の紙漉き職人の場合は、上に述べたような「小集団」の働きよりもむしろ、水やトロロアオイなどの原料を研究しながら、自分の遂行している手続きを自問していくというプロセスのほうに、主たるきっかけがあるように思われる。彼自身、すべて自分で実験することによって改良・工夫したと述べているように、絶えざる努力と熱意の賜である。しかし、それらの努力を背後で支えたところの地場産業を復興して過疎に悩む自分たちの地域を活性化したいというような地元の願い、すなわち、それはきわめて社会的な要因であるが、も見逃すことができない。また、本人も述べているように、全国的な展示会等における入賞経験などが、大きな励ましになっていることもたしかである。

本稿の前半で紹介した波多野らの、文化を伝承しそれを超えるためには手続的知識を遂行する中で概念的知識を構成していくことが必要だという仮説は、われわれの調査した二人の職人の場合においてもよく現われているように思われる。二人とも、自分が受け継いできた知識 (文化) の到達水準を確実に高めることに貢献しているからである。

## 文 献

- 1 高取憲一郎 「技能知の認知心理学的研究」 鳥取大学教育学部研究報告 [教育科学] 1991年 第33卷 2号, 435-447
- 2 生田久美子 『「わざ」から知る』東京大学出版会 1987年  
同 「からだでわかる」 『岩波講座 教育の方法 8』 岩波書店 1987年所収 76-107
- 3 波多野諄余夫, 稲垣佳世子 「文化と認知」 『現代基礎心理学 7』東京大学出版会 1983年所収 191-210
- 4 南博 『日本人の芸術と文化』 勤草書房 1980年

(1992年 8月31日受理)

